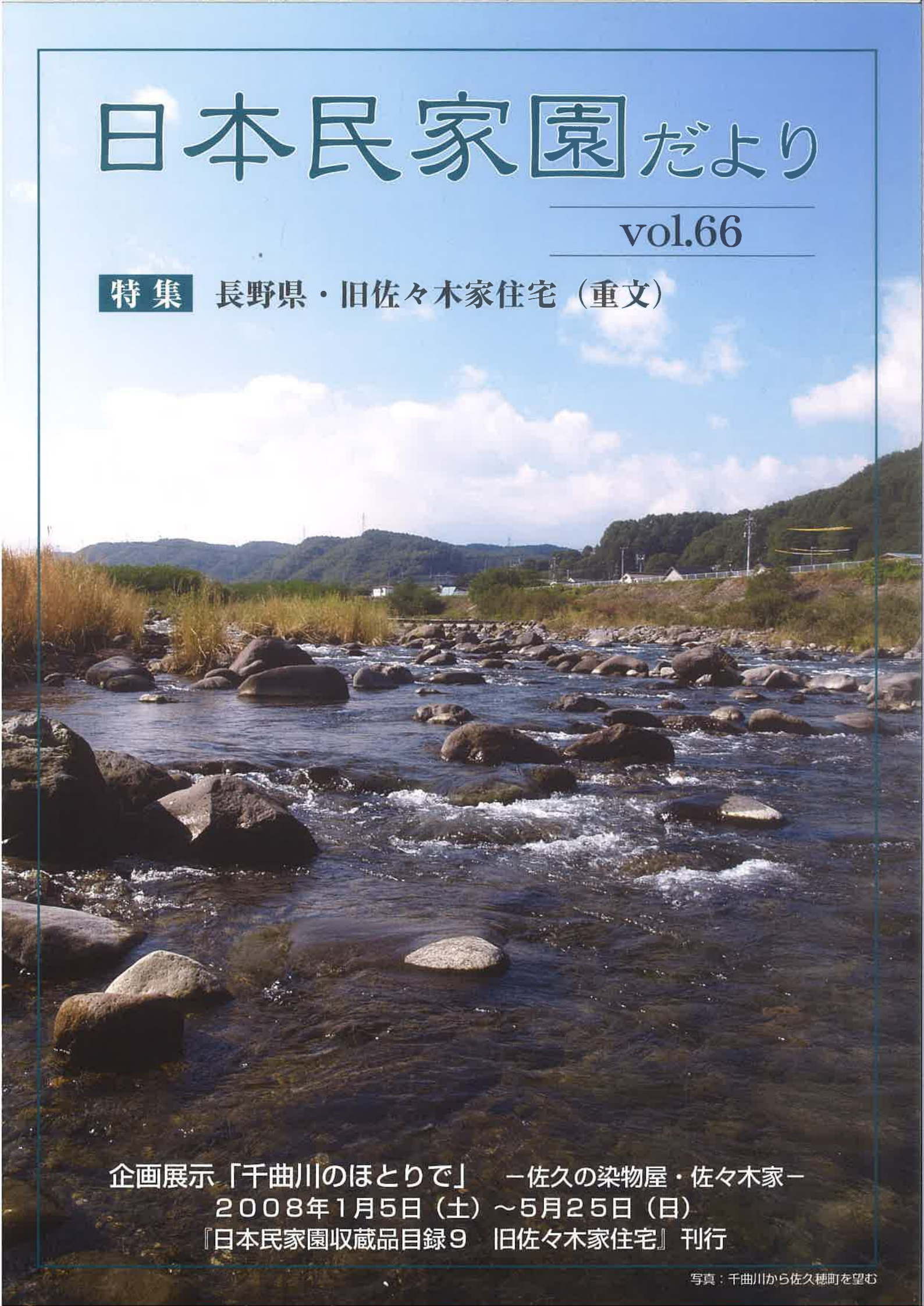
日本民家園だより

vol.66

特集 長野県・旧佐々木家住宅（重文）



企画展示「千曲川のほとりで」　－佐久の染物屋・佐々木家－
２００８年１月５日（土）～５月２５日（日）
『日本民家園収蔵品目録９　旧佐々木家住宅』刊行

写真：千曲川から佐久穂町を望む

千曲川のほとりで

－佐久の染物屋・佐々木家－

はじめに

長野県南佐久郡佐久穂町は、八ヶ岳東麓の高原地帯で、町の中央には千曲川が流れています。旧佐々木家住宅は、かつてこの地にあった上畑村に享保１６年(1731)ごろ建てられました。しかし寛保２年（1742)、千曲川が大氾濫を起こしたため、翌年、村全体とともに山裾へ移されました。

一方、川は災害だけでなく、恵みももたらしてくれます。たとえば、佐々木家は幕末から昭和４０年ごろまで染物屋（衣服や糸、布などを染める店）を営んでおり、布を染め上げる過程で千曲川が大いに利用されたのです。

今回の企画展では染色道具を中心に、佐々木家で使用された民具を中心に紹介いたします。

寛保の川流れ

いまから２６６年前の寛保２（1742）年、旧暦８月２６日ごろから近畿・中部・関東地方を台風が襲い、利根川や荒川など各地の河川が氾濫して大被害が出ました。

旧佐々木家のあった上畑村もその例外ではありません。旧暦８月３０日深夜、千曲川をはじめとする大小の河川が氾濫し、村の四方から濁流が押し寄せました。流失家屋１４０軒（人口比 84%)、死者２４８名（同40%)、流失した田畑は約３割にのぼり、村は廃墟になりました。

生き残った人々は、村を元の位置より山側に移し、数十年かけて復興させました。寛保２年が戊年であったことから、この洪水は「戊の満水」あるいは「寛保の川流れ」と呼ばれ、現在も地元では犠牲者を供養する石碑がみられるほか、洪水のあった日（新暦では８月１日）には寺で法要が営まれ、各家では墓参りをするそうです。

移築前の佐々木家住宅（昭和 40 年撮影）

さて、幸い旧佐々木家住宅は流失をまぬがれ、翌年には村の移動にともなって移築されました。史料によると、移築作業は延べ１８５名の村人が手伝ったようです。

佐々木家のくらし

昭和の始めごろ、佐々木家には１０人以上の人々がくらしていました。一家３世代のほか、染め物の職人、田畑の仕事を手伝う作番などです。

佐々木家のふだんのくらしぶりは、現在からみれば質素でした。毎日の仕事は忙しく、とくに女性は夜も針仕事などをして休む間もなく働きました。朝・昼の食事はご飯に味噌汁と漬け物、夜は米を節約するためウドンが定番で、魚や肉はめったに食べませんでした。衣服もほぼ毎日同じものを着ていました。

冬はとても寒くなりますが、暖房器具はコタツとヒバチぐらいのものでした。寝ていると布団の口の周りが凍ってしまうので、ホオッカムリ（頭と顔を布でくるむこと）をして寝ました。吹雪の日は、屋根のケムリヌケ部分から家の中に雪が吹き込んできたそうです。

しかし、祭りや行事の日には、アンコロモチやオコワなどのごちそうを作り、ウサギの肉などを料理して楽しく過ごしました。マユが良い値で売れた年など、子供は好きなものを買ってもらえたそうです。また、結婚式などがあると何日もかけて皆でお祝いし、コイの煮物や手打ちソバを作って来客をもてなしました。

佐々木家の生業

佐々木家は代々豪農で、所有していた田畑の広さは「人の土地を踏まなくても良い」ほど広かったそうです。田畑では千曲川のもたらす肥えた土と豊富な水を利用して米を中心に生産していたほか、一部を小作（土地を借りて農業を行うこと）に出し、年貢を受け取っていました。また、古くから養蚕を行っており、家の中に設置した棚で蚕を育て、昭和３５年（1960）ごろまで年に４回出荷していました。

さて、佐々木家はこうした農業のかたわらで、現金収入を得るため、時代ごとにさまざまな事業を行いま

した。江戸時代には食料や衣類を扱う問屋を営み、幕末になると染物屋を始め、昭和４０年ごろまで南北佐久郡を営業範囲とした手広い商売を行っていました。昭和初期には乳牛を飼い、その乳を出荷していたこともありました。そして第二次世界大戦後には、農村の余剰労働力を利用して農業土木の会社を起こし、現在に至っています。

なお、土間の２階部分を利用して、江戸時代から大正ごろまで寺子屋（読み書きやそろばんなどを習う教室）を開いていたことも特筆すべきでしょう。

佐々木家の染物業

[概要]

佐々木家は江戸時代末に染物をはじめ、移築の直前まで家業としていました。紺屋はかつてどこの村にもあったそうです。屋号は「龍田屋」といいました。染めの職人を「コウヤショクニン（紺屋職人）」といい、１年中住み込みで、常時３人、夏場ハッピを大量に染める時は増員し、多い時は５、６人いました。いずれも男性で藍染めのため手や爪は青く染まっていました。職人達は家族同様に扱われ佐々木家のマエデノザシキ（ザシキ）を寝起きに使い、休みは盆・正月位だったそうです。

（木下あけみ）

[藍染め]

藍はタデ科アイから取る染料で、防虫・殺菌・堅牢作用があります。江戸時代に木綿の普及とともに一般化し、衣類などの染色に多用されました。藍染めは、発酵の状態・温度管理・攪拌などの染料の維持に手間隙と技術を要しました。また染色も藍ガメに浸けては搾って空気にさらし（＝酸化）、青色を発色させるので、濃色にするにはこの作業を根気よく繰り返す必要がありました。「藍は生き物」という言葉がある位扱いが難しいものでした。

佐々木家のソメモノコウバには、藍染めの大ガメが地面にいくつも埋めてありました。大ガメは４つ１組で田の字型に配置され、その中心にある「フクロ」という空間に、冬はコビキヌカ（おがくず）を入れて燃やしました。カメを温めて藍の発酵を促すためです。アイガメに入れる藍玉（藍の葉から作られる染料）は、主に徳島から取り寄せました。質の良いものと悪いものがあったそうです。

佐々木家で藍に染めるのは木綿が多く、糸染めが多かったそうです。そのほか消防や商売用のハッピを染めました。盆暮れに1000枚以上受注した時もありました。柄は餅米から作る糊でつけました。布を染める時は、白生地に大豆から作った呉汁を引き、カマドで蒸し、藍ガメに浸けました。

染めた糸や反物はニワで干し、夏場のハッピの盛りの時は千曲川の河原を使って干しました。型染めなどの糊も千曲川で洗って落としました。

ソメモノコウバには神棚があり、アイジンサン（藍神様・愛染明王）を祀って家業繁栄を祈っていました。

（木下あけみ）

[染めの型紙]

型紙は、着物にさまざまな柄を染め抜くために用いられる道具です。柿から抽出した「渋」（防水効果がある）を塗った和紙に、熟練の職人が手作業で模様を彫って作ります。型紙は、そのほとんどが伝統的に伊勢湾沿岸の白子と寺家（現：三重県鈴鹿市）で生産されてきたことから、「伊勢型紙」とも呼ばれます。

型紙を使って布を染める方法は、大きく分けて２つあります。ひとつは、布の染めたくない部分に糊を付け、布全体を染液に浸す方法です。もうひとつは、染めたい部分に色の付いた糊を付ける方法です。どちらの方法にせよ、広い範囲を染めるには、染色の職人が型紙を丁寧に置き直しながら、模様がずれないように染めていきました。

型の模様には、細かい「小紋」や、現在ではおもに浴衣に使用される「中型」などの種類があります。時代ごとの流行や生活場面にあわせ、人々は粋な装いを楽しみました。

佐々木家の型紙の中には「通し」「縞」など、基本的な小紋柄のほか、遊び心あふれるものも見られます。また、「追掛型」といって、模様を複数の紙に彫り分けた型紙もあります。

（野口文子）

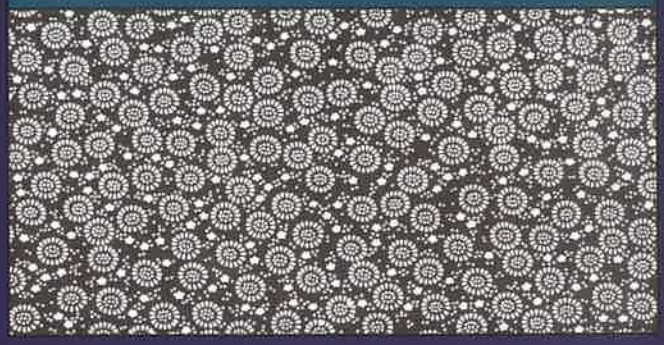
アイガメ

背景写真:移築前の佐々木家　縁側のようす（昭和40年撮影）

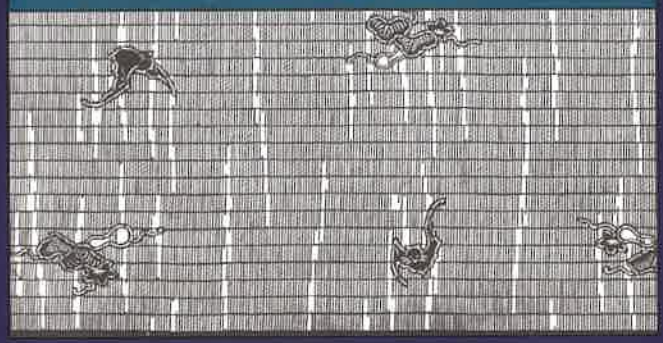
型染めの型紙

「雨龍と七宝と菊」

「菊」

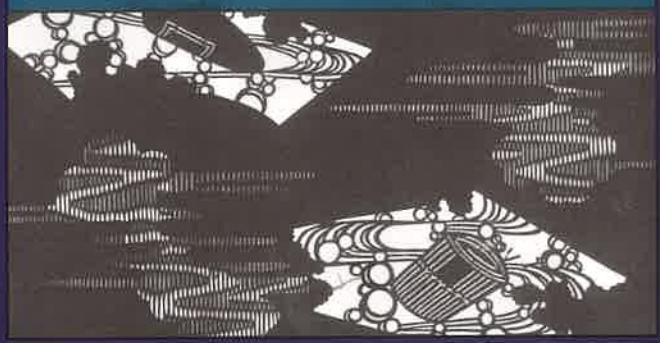


「やぶれ縞に瓢箪と蝙蝠」



「花菱」

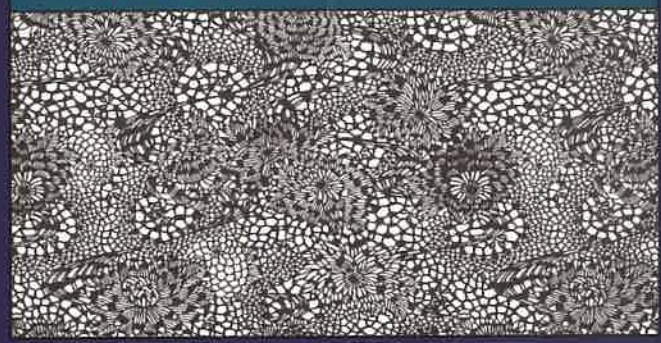
「流水に桶と徳利」



「柳に傘」

（追掛型）

「流水に菊」



日本民家園だより　vol.66　発行：平成２０年１月５日

川崎市立日本民家園　http://www.city.kawasaki.jp/88/88minka/home/minka.htm
〒214-0032　川崎市多摩区枡形7-1-1　TEL 044(922)2181　FAX 044(934)8652　交通 小田急線「向ヶ丘遊園」駅南口下車徒歩13分
開園時間　（3～10月）午前９時30分～午後５時　（11～2月）午前９時30分～午後４時30分　（いずれも入場は閉園30分前まで）
休園日　毎週月曜（祝日の場合は開園）、祝日の翌日（土・日曜の場合は開園）